2025 年 7 月号

合　同　No.４９５

「器、金継ぎ」

世田谷中原教会牧師
金　明瑾

「人よ、神に口答えするとは、あなたは何者か。造られた物が造った者に、『どうしてわたしをこのように造ったのか』と言えるでしょうか。焼き物師は同じ粘土から、一つを貴いことに用いる器に、一つを貴くないことに用いる器に造る権限があるのではないか」（ローマの信徒への手紙９章２０節～２１節）。

最近、わたしがよく口ずさんでいるのは、「土の器」という賛美です。その歌詞「土の器、欠けだらけのわたし、ヒビだらけのわたし」は、かつて見た、けれども何十年もの間すっかり忘れていた、ある夢を思い出させてくれました。その夢は、何かの折にふと思い出すこともあるものでした。それは、主イエスの御手の先に素焼きの壺があり、その壺を自分自身だと感じていた夢です。

何十年という歳月を振り返るとき、わたしの身体には老化という形で衰えが現れ、元に戻すことのできない欠片が少しずつ落ちていくように感じています。

また、人が誰しも抱える祈りの課題、人間関係、健康問題、経済問題の中でも、とくに多くの人がむずかしさを感じているのは、人間関係ではないかと思います。わたしも例外ではなく、家族、友人、そして教会での人間関係の中で、キリキリ、ミシミシと音を立てるようなひび割れや、ジンジン、チクチクとした痛みを抱えてきたように思います。そして今のわたしは、ときにボロボロの素焼きの器のように思えることがあります。「神に口答えする」つもりはありませんが、それでも、もっと素敵な器になりたいと、どこかで渇望していたのだと思います。

しかし、今年の５月の始めに、個人的な三つの祈りの課題をもって祈る中で、ふと頭に浮かんだイメージがありました。それは、金継ぎを施された器の写真でした。３分割されたものがきれいに金継ぎされた器です。割れたもの、ひびが入ったもの、破片が落ちて欠けたものが、捨てられることなく金継ぎで命を吹き込まれ、元よりも美しく、ある意味では世界に一つしかない価値ある器へと生まれ変わった姿でした（現在、三つの祈りは応えられています）。

そのとき、わたしは素焼きのままでひび割れ続けていたのではなく、実は御手によって火の中に入れられ、苦い薬を塗られていたのだと気付いたのです。何度も薬が塗られ、何度も火の中に入れられた器。それでも割れてしまったひびを、神は御手で一つひとつ金継ぎしてくださったのだと気付きました。「ああ、『内なる人』とは、このように新たにされるものなのかもしれない」と思いました。**「だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの『外なる人』が衰えていくとしても、わたしたちの『内なる人』は日々新たにされていきます」（コリントの信徒への手紙二４章１６節）。**

さて、パウロの言う「貴い器」とは何でしょうか？高価な器、見栄えの良い器、という意味もあるかもしれません。でも、主の御手によって用いられる器、神がいつでも気兼ねなく手に取ってくださる器、それこそが「貴い器」ではないでしょうか。

これもまた振り返ってみると、わたしの歩みは、自分自身が思い描いていたような「理想の器」ではなかったかもしれません。それでも、神は確かにわたしを用いてくださいました。「ひび割れた素焼きの壺」、「貴くない器」、そう思っていたのは、もしかするとわたし自身の思い込みだったのかもしれません。

思い込みではなく、わたしが本当に信じるべきことは、わたしが御手によって造られ、そして主が用いやすい器へと造りかえられた、ということです。そして、今もなお主の御手によって造りかえられ続けているのだと信じています。だから、わたしはもう落胆しません。主イエス・キリストを信じるならば、わたしたちは決して落胆することはないのです。

わたしたちの人生における痛みや苦しみによるひび割れ、そして欠けた部分もまた、神の御手によって金継ぎされ、唯一無二の、個性豊かで、御手に用いられる「貴い器」へと生まれ変わっていくのです。

金継ぎ